ふれっぷ

第30号

Хоккайдское Общество “Япония-Росссия”

発行日／2015年11月30日

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 緑苑ビル601号室 TEL(011)261-8887 FAX(011)261-0177 E-mail druzhba@do-nichiro.org
発行人／大久保慧 北海道日本ロシア協会会長

第50回 サハリン平和の船

- 旧国境と敷香訪問の旅
- 平和観音像建立慰霊の旅
- ユジノ自由プラン＋ふるさと訪問
- 第10回北海道･サハリン州市民交流会議

30年の歴史に支えられて

会 長 大久保 慧（おおくぼ さとし）

樺太出身者による墓参を契機に開始された「サハリン平和の船」も記念すべき戦後70年の今年９月７日㈪～９月11日㈮、４泊５日の旅は上記４コース、55名の参加者のご尽力により、それぞれの目的、願いを達成し、無事終えることができました。参加者皆様のご尽力、ご協力に敬意を表し、お礼を申し上げます。昭和60年（1985年）に開始された「平和の船」は満30年の歴史に支えられ参加者は約5,600名に達しました。私共の先輩が築き上げた貴重な歴史の上に、第50回平和の船はまた新たな財産を積み上げることが出来たと確信しております。旧国境と敷香訪問の旅にはNHK記者とカメラマンが同行し、「樺太･千島戦没者慰霊碑」において追悼式を行った様子が９月14日㈪、NHKテレビ「ほっとニュース北海道」で放映され、多くの道民の皆様から高い評価を得ております。この度、第50回「平和の船」の報告集「ふれっぷ」第30号を発行するに当たり、４コース、それぞれの立場から、貴重な原稿、写真等を寄稿頂きましたことに感謝申し上げます。ご協力下さった皆様有り難うございました。

また、どこかで第50回サハリン平和の船に参加された、すべての皆様とお会いできる日を楽しみにしております。

▲落合（ドーリンスク）追憶の碑における追悼式

旧国境と敷香訪問の旅コース

ふるさと敷香（ポロナイスク）を想う

東京都 杉 本 喜 吉（すぎもと きよし）

渡樺８回目、生まれ故郷へ帰る、これは人間としての本能なのだからなのか、昨年は敷香まで行ける日程が無かったので途絶えましたが、それまで５回連続でした。今回も最後と思い参加いたしました。２月頃から右足が痛み、警察病院でＭＲＩの検査結果が「脊髄管狭窄症」と診断され、部長に手術以外治る事はないと言われたので、担当の医長に手術の日程を決めようとしたら、医長はまだ早いと言い体操のレシピを呉れたが、私は体操はせず、足を揉んだり動かしたりしていると何とか歩けるので、11月頃まで手術せず頑張るつもりです。

中学時代

私は、終戦時14歳、旧制中学（樺太庁立敷香中学校）の２年在籍中と言っても、入学と同時に学徒動員で１学期だけ教室で授業を受けましたが、２学期から午前は教練、軍隊と同じで、午後からは海岸にかり出されバケツで海水を汲みタンクを煮詰め塩を取る作業でした。又、王子製紙のパルプの移動作業もさせられました。２年になったら、泊まり込みが多くなった、保恵では、農家の供出用ジャガイモ掘り、袋詰め、運搬。気屯では滑走路の土盛り作業、モッコに砂利を入れ200ｍを終日やったが、一度も飛行機の滑走を見た事がなかった。

夜は、毎日先輩により精神の注入と称し、鼻血が出るまで殴られた。毎晩殴られていると不思議と快感が湧いてくるのである。誰一人泣きだす者はいなく、泣けば尚更殴られるので、寝床に入ってからシクシクしている者がいた。

２年の５月に乙種予科連の試験が有り、学科１日、体育１日で大勢の若者が受験に来たが、大半が学科で落とされ、私は、見事合格で喜んでいたのに。

学徒義勇戦闘隊と玉音放送

昭和20年８月９日の「防衛召集」により、13日樺太庁長官の命により「敷香中学校学徒報国隊」を「敷香中学校学徒義勇戦闘隊」と改め15日に校旗との決別式を行った、校旗の房を各人１房づつ持ち帰った。

帰り道、鉄工場により竹に括る金物を探し、佐知の渡船場近くに行ったら、ラジオの声が高く聞こえ、出てきた人が戦争が終わったと足早に走り去った。

家に帰ったら、姉がラジオで天皇の声で戦争に負けたと言っていたと、それを聞き私は立っていることが出来ず、腰砕けのように蹲った。

結局、神風は吹かなかった、学校の配属将校の桑原中尉殿はどうしているかと、日本は必ず勝つと彼は、本気で思って居たのだろうか、我々生徒に何と言い訳するのだろうか。

死の町敷香

８月７日　町役場の指示で、全員引揚げとなった。町民35,000人である列車はすし詰め状態で、大泊を目指した。全員退避に２日かかったようである。

私の家の家業は漁場で丁度鱒漁の時期だった、漁場は海豹島の近くの（円頓）で敷香から丸１昼夜かかる距離である。父、兄と漁夫３名の帰ってきたのは、８月９日だった。８日の夜は文字どうり死の町である、母と姉はすでに引揚げ、私一人になり、置き去りになったその夜は犬の遠吠えが朝まで止まらなかった。

朝方、父が戻り直ぐ出港するからと、積み荷の樺太マスを川に捨て、私も身の回りの品物をリュックに詰め込み横になっていた、やがて機関士の声で、駄目だ、スクリュウーが折れていると叫んでいる、入港時川尻で何かにぶつかったせいで、従兄弟がロスケに使われるならと船に火をつけ、私達は町の岸壁まで小舟で渡った。後で気が付いたら、もし船で逃げていたら知取沖でソ連の潜水艦の餌食になっていたと思う。

岸壁を登ると、消防自動車が１台止まっていて、直ぐ乗れとのこと、言われるまま乗った、８月19日朝８時、この日は靄がかかっていた、大通りを走り、本通り北一丁目まで来たら、前方に煙が上がるのを見た、宮通り来たら前方に火の手が見えてきた、咄嗟に運転手が火の中を突っ切るから、シートを頭から被れとの指示があった、手草通りでは、すでに両側の家に火が移り火と火がぶつかり合う中を突っ走った。小松通りを潜り抜けた時に皆命拾いしたと、顔を見合わせた、この時、火付の犯人を見た、軍服２人、民間人２人、である彼等は何か喚きながら一校の方に走っていった。消防自動車は、我々を駅まで送ってくれた。何で岸壁に停まっていたのか、運転手は一言もしゃべら

ず立ち去った。町の大半が焼け落ちるのは時を待たず、次の日一日燃え続けたものと思われる。40年の歳月を掛けた町並みが一瞬の間に瓦礫と化す、私は最後の目撃者として、生涯胸に刻み込むことになろう。

脱出から引揚げまで

駅の前は、荷物の山、おそらく最後の列車が来なかったので、荷物を捨て線路を歩いたものと思われる、我々も線路を歩くと決めたが、暫く行くと右側の線路際に赤子の泣き声が聞こえた、私も火の中をくぐり抜けた恐怖も冷めない状態で助ける術もなかった、少し歩くと今度は左側にやはり赤子の声が聞こえた。この我が子を捨てなければ自分の身も持たないという、地獄の絵図としか思えない悲惨な現状に直面しても、私はただひたすら線路の枕木を踏み外さないよう歩くしか術が無かった。内路まで（18km）来たら、夕暮れになった。

と、その時山手から、話声がし、ぞろぞろと人影が近づいてきた、聞くと恵須取方面から避難して夜どうし山道を歩いて来たという、急に賑やかになり、私も急に元気が出､足も軽くなった。泊岸の手前で小休止、軽食を取り又歩き始まった、翌日の午後に従兄弟の実家がある、東柵丹に着いた、叔父らはすでに南下しており、私達は、此処を拠点とすべく、部屋の確保、叔父は養狐業をしていたので地下の蔵には当分暮らしていける程の、米、味噌が貯蔵していた。

幸いラジオが聞けて、８月22日の豊原の空爆のニュースも判り、もう動かない方が良いと判断、何もせずぶらぶらしていた、８月25日ソ連軍の戦車も入ってきたが家裏からそっと見ていた。８月28日元の居住地に戻れという、ソ連軍の命令が出て、叔父の家を出て佐知に戻った。

途中、敷香の焼跡を見て今更ながら火事の恐ろしさを目に焼きつけた。

佐知に戻っても誰とも連絡がつかずにいた、親父はまだいる樺太鱒を取るべく網の繕いに入り、兄たちは船の調達に駈けずり回っていた。

10月初旬に学校から連絡が入り、再開するという、焼け残った一校が再会の場所で午前、中学、午後、女学校とした。その数は元の半数だった。

昭和21年から、本土への引き揚げが始まった、順番を如何して決めたか分からないが、学校へ行くたびに旧友が減り始めていた。

佐知の周辺も近隣の方々が引き揚げて行った、漁師をしているのも我が家だけになった、その為、鮭、鱒漁は大漁続き、ニシンも取り放題で、漁労庁の役人が頻繁に来て親父とウォッカを飲み比べていた。冬は幌内川で氷下魚（コマイ）が毎日２屯から３屯も取れた。親父もこのままでは、引き揚げられないと判断、網の不足を理由に魚を取らないと決めた、引揚げ許可を取っているのに駅で２回も足止めを食った。ついに親父が賄賂を使い、敷香を脱出した。

真岡を出港して海峡を越えた頃から波風が激しくなった、台風にぶつかったのだ、船員も初めてだと言っ

▲旧国境「樺太、千島戦没者慰霊碑」における追悼式

ていた、ようやく礼文島と利尻島の間に入れて難を逃れ、９月22日函館港に入港した。

敷香での出来事

① 昭和12年12月31日大晦日の夜、岡田嘉子、杉本良吉の恋の逃避行、越境事件、末路は、杉本はスパイ容疑で銃殺刑、岡田は数奇の運命を辿り一度東京に帰ったが、モスクワで89歳の生涯を終えた。

② 昭和16年３月映画「北極光」若原雅夫・真山くみ子のロケが幌内川の氷上で行われて、エキストラーで駆り出された。

③ 昭和15年５月29日名横綱の大鵬関が生まれた、女学校の向かいで牧場を経営していた。白系ロシア人の父親も５歳で引揚げだから記憶にないという、今年の「ふるさと敷香訪問」で昨年建てられた銅像の前で記念撮影をした、200坪もありそうな公園の中央にある。

旧国境と敷香訪問の旅コース

アインス宗谷ラスト航海

新潟県 鴨 澤 征 市（かもざわ せいいち）

自己紹介：昭和14年７月18日に母が黄疸病のため豊原の庁病院（現：軍人病院）で生まれ、病院の育児用ミルクは高額だったので２日後に３里北の豊北村小沼の家へ叔母と帰り。中央農事試験場の官舎のお母さん方からの貰い乳で育ちました。引揚は昭和22年４月の第２回引揚船「宗谷丸」でした。従って、ロシア人とは、樺太で５年半・サハリンで１年半生活を共にしました。

第42回サハリン平和の船・文豪チェーホフの足跡を辿る旅：生意気盛りの青春時代に「かもめ」を読みましたが、会話の内容が分からず全く理解できずに読み終わりました。でも、ツアーコースが北緯50度を超えて大陸との連絡港アレクサンドロフスクサハリンスキーまで行くので応募しました。理由は、祖父や父が超えたことの無い50度線を超えることが出来るからでした。

此の時の収穫は、中学時代に北原白秋が昭和10年代初期にアントン・チェーホフの足跡を訪ねて小沼のロシア人の丸太小屋に立寄ったと知り。皆がアントン、アントンと親しく呼んで居たロシア人のことを思い出し、チェーホフと親戚だったのかと思い込んでしまいましたが。そうではなく、アントンとはロシア正教の洗礼名であると知った事でした。

▲敷香の慰霊碑

第45回宮沢賢治サハリン紀行団：３カ所のパルプ工場を訪ねるコースでしたので、小学校に入る前の年に落合の王子製紙に努めて居た伯父さんが工場を案内してくれ「水路に浮かんだ丸太をトビ先の竿で運んでいたのを思い出した」のと「小沼から分岐する鉄道の終点の町川上炭山」が組まれていたからでした。此の時の収穫は、川上のロシア式ブロックビルの４階に、日本時代の炭住に残された生活物資が、学生を中心とした郷土史クラブの人達の発掘品として要領よく整理され展示していたのを見せて貰った事です（先住民族日本人は遺跡の人々！）。

第50回旧国境と敷香訪問の旅：第42回アレクサンドロフスクサハリンスキーへの貨客列車の車窓からは、旧国境らしい遺物または伐開跡が分かるかと移り行く景色を見て居ましたが全くそれらしきものが見られませんでした。それと、敗戦後建立された26の慰霊碑、記念碑等が現在どの様になって居るのか！と申しますのは、現役時代仕事で県内を巡りましたが、減反以降「開田記念碑・耕地整理記念碑等」が草息れのなかに埋もれて居るのを数多く見てたからで。建立当時の人達が年老いてしまい二世・三世の時代となっては、やむを得ないことなのでしょうが。増して、外人の物で有ればなおさらのこと。これらを、将来的にどのように取り扱はなければならないのか。建立した人達の大半は樺連の会員でしょうから樺連はどのように

考えているのかと思い至ったからです。

国設（古屯）樺太・千島戦没者慰霊碑は、白樺、泥の木、樺太唐松、蝦夷松の林の中に、一際目立つ日本から持込んだ赤松に囲まれた霊場は。真っ白なコンクリートの囲の中で祀られた方々は安堵しておられるのではないかと思われました。しかし、敷香の「倶会一処」は草が生え放題。上敷香の「追憶の碑」は床のブロックが凸凹状態。同オタスの「日本人共同墓地」は広い草斑は刈られていましたが碑の土台が剥がれていました。豊原の「日本人死没者合同慰霊碑」は北海道知事が訪れた後で管理が行き居届いていましたが、持ち込んだ墓石類の整理が必要ではないかと思われました。

石碑は、自然状態では永久的なものなので。建立した人達の熱意と感情は大切にしなければならないけれど、二世・三世の時代となると疎かになったり破壊されてしまうことが多々有るようです。今回、現地を案内してくださった日ロ協会支部の方々の好意によるところが大きいのでしょうが、いつまでも甘んじて居ないで。唯一引揚者の組織「樺連」が現地の方々による管理組織を結成してもらい、共同で維持管理をする時代となっているのではないでしょうか。石碑の建立地出身の二世・三世がツアーを組み、先人の苦楽の時代を偲びながら現地組織の方々に感謝しては如何でしょう。

もう帰らない樺太：ソ連が崩壊して数年後にエリチェン大統領が訪日した際に外貨獲得のため、過去にアラスカを売ったと同じ感覚で「樺太を買ってくれないか」と申したそうですが。自民党内の協議の段階で代議士先生達は「日本人が開発したのに金を出すことはない」を無視し「やがて無償放棄されるだろう」の意見が大半を占めたとか。ナフサが発見された今日「樺太は、もう帰ってこない」！先生方の国を思う感覚を無念を感じるのは私だけでしょうか。

もったいない：樺太最後の朝、食堂で私のパンを落とすとゆう不始末から大声で叱責されましたが。私は「日本人なので」と口答えしてしまい皆さんに嫌悪感を覚えさせてしまったことをお詫び致します。しかし、ホテルにはボーイは居ないしチップ制も無いので。大英帝国の貴族の優生学による優越感を味わうマナーは適応しないのではないでしょうか。「もったいない」がノーベル平和賞を戴いてからは欧米でも、やっと変化しつつあるとのこと。私は「敗戦国民」であり「引揚者」です「もったいない」ものは「もったいない」のです。

故郷樺太：歳のせいか現在の事どもを思い出せなくても、昔のことは特に幼いころのことは何かにつけて懐かしく思い出します。朝日の昇る小沼の丘陵、晴気川、鈴谷川は変わる事が無い。稚内～コルサコフ航路に就航船が設けられましたら、また参りたいと思いますのでお誘いください。

旧国境と敷香訪問の旅コース

「積極的に平和の船を・・・」

赤平市　三　上　和　子（みかみ　かずこ）

昨年、初めて参加して、おしまいと思っていたところ、今年は旧国境と敷香訪問の旅コースがありました。

私達夫婦が生まれた所は敷香ではありませんが、そこから左（西海岸近く）に北小沢と塔路ですので、迷わず参加することにしました。亡くなった父の姉も母の妹も樺太引揚者で健在ですから声をかけましたが、「結婚して15日目に父さん（夫）が召集されて、姑さんと４年間暮らした。敗戦後はリュックによもぎをドッサリ採ってきて、少しのじゃがいもを入れて食べた所なので行きたくない」とか「夜も寝ないで野山を逃げ廻って、死んでもいいから眠りたいと思った所だから行きたくない」との返事でした。

９月７日㈪午後２時、家を出て稚内へ。洋上慰霊祭を経て、順調に豊原着。

９月８日㈫午前８時ホテル発。落合で草かげトイレ？休憩。白浦では、道路わきで売っていた初めて見るフレップを買いました。杉本さんはタラバ蟹を買って、お昼に皆にごちそうして下さいました。さすが本場の味でした。

９月９日㈬午前８時発。気屯の樺太・千島戦没者慰霊碑前の写真は、ここで戦死されたお父様の好物を供えられた冨士本さんはじめ、みなさん複雑な表情をされてます。杉本さんが、他にも写真を何枚か送って下さったのですが、そちらは微笑んでます。

激戦だった、この地には戦争70年を経た今も、多くの遺骨が収集されず埋もれたままなのだそうです。一体、どの位の数なのでしょうか？残された遺族のもとには箱に入った石ころひとつが届けられたのでしょうか？

▲お別れ夕食会

戦争は権力や財力ある、ひと握りの人間の中のひと握りが多くの国民の命を奪い、不幸に陥れます。帰国後、鴨澤さんが送って下さった自費出版誌「樺太の敗戦記憶」を読み、さらに、その思いを強くしました。

慰霊式は、初秋の北緯50度とは思えない位あたたかく快晴で、無念を抱いたまま埋もれている方達が待っていて下さったかのようでした。それなのに、９月19日㈯には、恐ろしい安保関連法が成立し、とても残念です。「何のために合掌してきたのだ！」と叫びたいです。しかし、戦前と違い、18才以上の国民全員に選挙権があります。ありがたい事です。日本国憲法の素晴らしさを今、改めて感じています。あきらめては暗い過去に逆戻りです。

９月10日㈭９時、敷香のホテル発。白浦だったでしょうか？想像以上の有料トイレは、15ルーブル（約30円）でした。昨年同様、豊原の日本人墓地で追悼。観音像が建立される日を待ち望んでいます。その後、スーパーでジャム、はちみつ、ウォッカを買ってホテルへ。少しの間にマトリョーシカも。

午後７時からは、お別れ夕食会。平和観音像建立慰霊コースに参加された太田さんは、お母さんの片身の大島紬で出席です。敗戦後、お父さんが病死され、お母さん一人で６人の子供達を連れて引き揚げてきたそうです。６才の長男さんがお父さんのお骨を首にさげてきたそうです。その長男さんも今年１月に亡くなり、兄嫁さんからゼリーをお供えしてと頼まれて持って来たそうです。

太田さんとは不思議な縁を感じます。10年以上前に、観音像の製作会社である㈱山本石材で一緒に勤めていて、社員旅行か何かの折に、お互い樺太生まれであることを語り合った事が、今回の旅に結びついているような気がします。真言宗の女性の皆さんも美しい着物姿で出席され、会場がとても明るく和やかになりました。

若い総領事さんの「観音像は国交、台座は民間交流…」との挨拶や、この日が90才の誕生日の江口さんの堂々としたスピーチ、敷香在留邦人の方の「毎年。この時期に日本の皆さんと会えるのが嬉しく楽しみ…」との言葉が胸に残りました。真言宗の皆さんの美しい歌声や踊り、アコーディオンやバラライカによる大好きなロシア民謡等々、どんなコンサートよりも充実していました。

９月11日㈮波が高く揺れる船内で、秋山住職さんのお話をお聞きする機会に恵まれました。２、３年前まで仏法とは無縁で、今も理解できないでいる私ですが、お供物等を持参され国境に向かい、敷香、気屯、上敷香、佐知、豊原の５カ所で、寄ってくる蚊をはらうこともせず（できず）読経された住職さんの説法は心に沁みました。

船酔いしそうになって横になると、ずっと泣き続けていた１才位の赤ちゃんの声がさらに大きくなりました。私は６か月で引き揚げてきたそうだから、両親は、さぞ大変だったろうと考えました。高小卒後、当時としては良い就職先であったろう樺太庁に入ったものの、敗戦で北の塔路の炭鉱に行き、引揚後、また炭鉱に入り、労組の専従役員などして、母に苦労かける父を最後まで好きになれなかったし、やさしかった母には江口さんの娘さん達のように細やかな気遣いもしてあげなかったと思い、涙が出そうになりました。

帰国後、子供の頃、父は近所では誰も行った事のないボリショイサーカスや文化交流使節団のバレエや歌に何回も連れて行ってくれた事を思い出しました。

今回は、両親に感謝する旅になるだろうとの予想は、はずれ「反戦」と「反省」の旅になりました。そして、お世話下さった森川副団長さんはじめ、参加された方達の大半は80才代～ 90才ですが、明るく元気で、いぶし銀のように光ってました。貴重な出会いに感謝しております。

私の「心の宝石箱」に反戦と反省といぶし銀が加わりました。来年、フェリーの定期航路が継続されましたら、また積極的に「平和の船」に乗船して、平和を念じたいと考えております。みなさまにお世話になりまして、ありがとうございました。

▲ユジノ市バザールの風景

旧国境と敷香訪問の旅コース

旧国境と上敷香訪問して

札幌市 国 枝 隆 雄（くにえだ たかお）

戦後70年の大きな節目の年に当り北海道日本ロシア協会主催の第50回サハリン平和の船によるサハリン旅行が９月７日から11日にかけて行われ、北海道日本ロシア協会会長大久保慧氏を中心に稚内国際旅客ターミナルでの結団式を行い期待の「ユジノサハリンスク自由プラン」「ふる里訪問プラン」「旧国境と敷香訪問」永い歳月の過ぎゆく時代を心を新たにしたことと想います。私は森川副団長と共に旧国境と敷香訪問の旅を行動して第２日はいよいよ敷香に向けて出発です。朝８時に添乗通訳の案内で専用バスに乗り込み11時頃に気屯に到着し目的地古屯の樺太千島戦没者慰霊碑において追悼式を行い、式は激戦地であった八方山麓の小川を流れる森林の静けさの中同行してくださった秋山住職によって行われ、式典を終えて国境50度線に向い、ここでは境界標識の確認をしてその周辺の現状を視察して古屯の日本軍のトーチカの残骸を見学して上敷香の慰霊碑参詣と旧日本軍兵舎を見学した時、残る陸軍兵舎を眺め当時の軍隊教育の厳しさを思い浮べ兵舎周辺の無残な光景に驚き雑草並びに針葉樹がおい茂り70年の歴史を感慨無量で現地を後にし敷香に戻り元の民間人居住地跡を散策して夕食には２日間一緒に付き合って頂いた３人を再度招いて共にし別れを惜しみ乍ら楽しい晩食のひと時を過ごしました。

明日は豊原に着いて昼食後に日本人墓地を参詣後にホテルでのお別れ夕食会日本総領事、サハリン日本協会会長が出席して総勢70数名によって終始大変な盛り上がりで良き想い出となるサハリン最後の夜でした。

さて、終戦記念日は戦場地によって異なりますが私共の中隊は今回訪問した上敷香方面並びに内路、気屯、古屯、八方山に通じる陣地作業「防空壕」中Ｂ29飛行機が空中旋回してビラを落下した後、戦車数台が我々の陣地に突入し終戦の命令を８月20日ころ中隊長からあり涙をのんだ次第で、後はソ連兵の指示に従い即応し内路近くの海岸に連行され武装解除され内路国民学校に集結し翌日早朝に、元の上敷香兵舎に各々の中隊が集合し現地に残留する中隊、シベリヤに行く兵士と分散され私共の戦友は残り戦時中陣地構築した周辺の道路工事作業、冬季間は「半田沢」周辺の伐採作業を行い、過労と食糧難にて苦労し収容所に帰る途中、衰弱して具合の悪くなる戦友もおり当時を思い現地の風景を見た時は忍びがたい心境でした。

▲北緯50°国境標識台座

更には「恵須取」方面に於ては本船の木材積込み作業等々行い幸い地方人の方「日本人」の残留の方も数人おられ漁労の方々は大変にお世話になり時季的に秋でもありイカ、魚類を頂き一息きつき終生忘れられず今でも感謝致しております。我々が日頃待ち望んていた疎開が昭和22年11月末ころ真岡収容所に到着し、樺太地方人の引揚者の援助、並びに手傳をし昭和23年10月末ころ漸く当時の雲仙丸に上船し11月５日函館港に上陸し、戦友と元気で再会を誓い解散致しました。

今回の訪問で感じたことは、先の大戦の反省から戦後日本が貫いてきた平和主義を自らの体験を若い世代に伝えて行きたいと考えております。

無事日程をおえて帰省出来ましたことは関係機関の方々のご盡力の賜と感謝申し上げます。

尚同行された方々も大変お世話様になり厚くお礼申し上げます。

▲旧上敷香125連隊兵舎

旧国境と敷香訪問の旅コース

故郷敷香訪問の旅

東京都 櫻 井 貞 子（さくらい ていこ）

近くて遠い旧南樺太、当時は、北緯50度日本最北端の国境の町敷香に死ぬまで、祖母弟妹の墓参りに行く事を、父母が引揚以来、常に心に思っていた言葉が死際まで、私にだけ話して居りました。

今度その機会を知り、70年間心に思いつづけていた父母が果し得なかった墓参りが、現実的に可能になった事に大変嬉しく思いました。

サハリンに行く事に決り、９月７日を一日千秋の思いで待ち焦がれて居りました。

アインス宗谷に乗船、待ちに待った日は修学旅行の知らない私はまるで中学生になった気分でした。

洋上で僧侶の方がの読経の供養最中に、70年前の引揚船最後の船で母が９ヶ月の弟を３才の妹は私が、１年生の妹６年生の弟乗船したもの最後の人数で雨の降る中、甲板で震え乍ら稚内の埠頭に着いた時の思いが走馬燈の如く脳裏に蘇り、胸にこみ上げて来る感情をおさえられなかった。

サハリンの第一歩70年の歳月の流れが、ロシア領土である事の現実で永年心ならずも旧樺への幻想は崩れた。不凍港で樺太の玄関口で栄えていた大泊港も変り果て唯々虚さだけが感じました。

戦争に敗けた国民である自覚を失いつつ平和に慣れ切っていることの悲哀を思い知らされた。

敷香へのバスの旅、東海岸線ぞいにオホーツク海を眺めつつ、夢にまで見た敷香の土地に降り立った。

「国に破れて山河あり」何気なく使っている言葉ですが、70年間思いつめていた、故郷への第一歩をどの様に表現するか言葉は出ず。胸につき刺る、口惜さ、涙すら出なかった。

東洋一と誇った人絹パルプの倒れかけた、煙突、挙大な廃墟となっている建物、唯々茫然自失とはまさにこの状態なのだと忘れていた感情をやや暫く平常心に戻る事を覚える。変らぬ幌内川の流れどこまでも続く砂浜、砂上の楼格、その砂上で街が形成され、恰もまるで楽土の如くに思いこみ、そこで人間の生きる術を育った学んだ街で、何よりも、大切な心の故郷である事には疑うべきもない。

その70年間片時忘れることのない色々な想い出を折りに振れて懐かしんでいた。

足元には当時の面影の片鱗すらなきことを嘆きつつも、直も故国になった、二度と戻らぬ日本領土になる筈もない故国のこの地に何故か愛着心を持ち続ける悲しいまでにこだわる切なさはいつまでも消せることが出来ない。

敷香への街の思いは心の支えになったと云わざるを得ないです。

大鵬関の銅像が建立されている事で日本の街であったことの永遠の証となっている。

今度の旅に参加して、人生年を取っても、学ぶ事の多い勉強になりました。

第50回平和の船の旅に同乗させて頂き、心より感謝と共に有難度うございました。

旅を共にした皆様方の御健康と御多幸を心よりお祈り申し上げます。

平和観音像建立慰霊コース

戦後70年サハリン慰霊の旅を終えて

札幌市 藤 浦 明 子（ふじうら あきこ）

今年で二回目となる平和の船への参加ですが、父である米田住職の願いもむなしく、ロシア側の都合により今年も平和観音の建立は難しいということから参加を迷っていました。それでも、周りの後押しと今年が戦後70年であるということから戦没者慰霊のために参加を決意しました。

今年も素晴らしい晴天の中、稚内港を出発し洋上法要を行うことができました。昨年の訪問で、この海で罪もない多くの人々が命を落としたということを初めて知り、法要中に涙があふれてきましたが、今年は少

し違った思いで参加することになりました。なぜなら法要の中で宗教舞踊『父母感恩』を舞うことになっていたからです。船の上で踊ることはもちろん初めての経験であり、強い風と揺れに不安がありましたが、この海で亡くなった多くの子供たちの、あるいは親を失った子供たちの思いを表現できるよう心を込めて舞わさせていただきました。そして自分自身、こういった特別な場所でこの曲を母と舞うことができた嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいになりました。

父はもう20年以上サハリンへ通い続けていますが、父から聞くサハリンの惨状から正直私は「サハリンには行きたくない」と思い続けていました。しかし年月を経てユジノサハリンスクは変化し続け、とても美しい街になっていました。おかげで私たちの旅はとても快適になり、今年は街中の散策なども楽しむことができました。中でも印象的だったのはロシア正教会です。中に入るとおそらく朝のミサの最中だったのでしょう。一般の参拝者と思われる方たちがお祈りしながら讃美歌を歌っていました。その美しい響きに感動し、一瞬で神聖な気持ちにさせられました。その後、中を見学していると一人のおばあさんが一生懸命、私の母にお祈りの仕方を説明しはじめました。人種や宗教、言葉などすべての壁を越え交流を図ろうとするおばあさんに、祈る気持ちはだれでも同じであるという深い信仰心を教えられた気がしました。

今回の旅で、私たちは日本人墓地のほか旧落合、旧白浦、旧真岡、旧大泊の４ヵ所の慰霊に向かいました。長い間参拝されていなかったため、慰霊碑をなかなか見つけられずあきらめかけた所もありましたが、それでもすべての場所をお参りできたのはガイドさんをはじめ、皆さんの協力と亡くなった方たちのお導きがあったからだと思いました。白浦で慰霊碑を見つけた時、青空からパラパラと降ってきた雨に誰かが「喜びの涙だね」と言った一言がそれを物語っているように思います。

３日目の夜には、日本総領事の公邸へお招きいただくという貴重な体験もさせていただきました。総領事は気さくで誠実な方で、平和観音へのご理解も深く、建立へ向けての明るい未来が見えてきた気がしました。

一緒にこの旅に参加してくださった檀信徒の皆さんをはじめ、各ご住職様たち、日本ロシア協会の皆さんなど本当にたくさんの方々からのご協力と応援をいただいたことで、父の長年の夢である平和観音の建立もきっと近い未来に実現されることと思います。その時はまた皆さんとサハリンに訪問し、平和を祈りながらも戦争が残した悲しみを忘れないよう深く心に刻みたいと思います。

願わくば、帰りの時のような大しけには二度と遭いませんように!!

▲「日本人戦没者合同墓碑」における追悼式

平和観音像建立慰霊コース

「サハリンへ行きませんか？」

千葉県　**菅　野　義　浩**（すがの　よしひろ）

知己との宴席の折、出し抜けに法友・伊藤聖健君から今回の旅の勧誘を受けた。曰く深く感銘を受けた旅だったらしい。サハリン旅行記を肴に杯を進める内、数々の挿話に引き込まれ、心地よい酔いのせいか、いつしか快諾していた。

好天の早朝、各地より参加者が集い、歓談の輪ができる。初参加の私を気遣い、聖健君が紹介してくれる。慰霊旅の大先達・米田僧正、苦楽を共にされた秋山僧正、盟友の玉川僧正、情熱溢れる大久保団長。そのご尊顔を拝し、結団式に気持ちが引き締まる。

いよいよ稚内港を出港。騒々しい甲板にて厳かな洋上法要を終えると、一人の青年から声を掛けられた。大韓航空機撃墜事件で宗谷海峡に身内を亡くして以来、参加が叶ったこの船で思いがけず法要に参列でき、

▲「アインス宗谷」洋上供養

▲白浦「回想の碑」供養

その感謝を伝えられた。旅の始まりに平和観音様から御縁を頂戴したのかもしれない。

船上より西能登呂岬を望むと、不意に携帯の電波が切れ静寂が訪れる。五時間の海路が一層長く感じられ、外国へ向かっている事を実感する。

コルサコフ港へ入港。初めて訪れたサハリンの空の色は稚内と同じ色であった。慌ただしく税関を抜け、次は陸路でサハリン市内を目指す。長時間の移動が終り、夕食のビールが沁みて、感慨の余裕もなくグッスリと眠ってしまった。

翌日から移動と慰霊の日々。落合「追憶の碑」、白浦「回想の碑」、追分「開拓物故者追悼塔婆」、豊原「日本人死没者合同墓碑」、熊笹峠「戦勝記念碑」、真岡「鎮魂の碑」、大泊「日本人墓」と七箇所の慰霊に立ち会えた。墓碑が見つからず右往左往したり、冷雨に見舞われたりといった事もあったが、鬱蒼とした墓苑の中、清らかで美しい姿で墓碑は我々を待っていてくれた。米田僧正が仰るには、およそ三十箇所の墓碑があり、未だ行かれた事がない墓碑もあると云う。

移動や食事の最中に、沢山の語らいがあった。以前より道路が良くなり信号も付いた事。普通に売店で物資が入手できる事。石油産業のお蔭で若者が増え、豊かになった事。初期の慰霊旅と比べると、遥かに快適になったと笑う先輩方の話に、以前の御苦労を想像した。

我々が衣で出歩くと、ロシア人のおばちゃんが遠慮無しに話しかけてくる。通訳してもらうと「着物が素敵ね！」と言っているらしい。こちらも「スパシーバ！」と笑顔で答えるも、確かに着物には違いないけど…と苦笑する。

郷土資料館等樺太時代の建物も多く残ってはいるが、現在のサハリンの街角に戦争の面影は少ない。公園で幼子を抱く母親同士が談笑している平和な光景を見ると、かつてこの地で戦争なんてなかったんじゃ…と錯覚してしまう。しかし、慰霊碑の前に立つと悲しい歴史に日本人の魂を揺さぶられる想いがした。戦後七十年、日露双方戦争を知らない世代の時代となり、戦争の記憶も薄れた昨今、これからの慰霊旅はどうなるのだろう。

今回、畢生の慰霊旅を続けておられる米田僧正に同行できたのは幸甚だった。奢らず飾らず自然体のその所作とお言葉は、今後の私の僧侶としての生き方に多分に影響するだろう。師の人柄を慕って集う方々の尊い姿に胸が熱くなった。初参加の私にも皆様気さくに接してくださり、それが嬉しくて、沢山食べ、沢山呑み、沢山語らった。

不思議な御縁の連続だった。今年限りで運航を終了する船、戦後七十年の節目、五十回を数える旅、参加しなかったら会えなかった方々、それぞれの機会に巡り会えたのは僥倖だった。今回お会いする事は叶わなかったが、きっと平和観音様の御加護と想いを馳せる。

帰りの船は大時化だったが、お蔭様で全員無事に日本へ帰還できた。再会を誓い合い、笑顔で別れた。

その後、自坊の秋彼岸法要で、檀信徒の皆様にサハリン慰霊旅の報告をしたところ、大変興味深く聞いてくれ、終了後は質問攻めにあった。拙い話だったが、自分の体験談に興味を持っていただけたと実感した。思えば、私も聖健君の話が切掛けだったっけ。今度、誰かを誘ってみようか。「サハリンへ行きませんか？」と。

ユジノ自由プラン＋ふるさと訪問コース

国破れて山河あり

福島県　佐々木　利　雄（ささき　としお）

齢今や92、戦後70年を迎え望郷の念に駆られ、第50回サハリン平和の船に参加しました。会長の大久保慧先生の暖かなご配慮、日本人会会長白畑様のご厚意、添乗員の伊藤様・村木様の懇切丁寧なご案内を頂き、楽しい思い出を残し、念願の帰郷の想いを果たすことが出来ましたことを感謝しております。

旧豊原での第１日目

この日は、参加者全員で市内観光でした。**樺太神社跡**では、大きな鳥居が無くなり、社殿までの石段は途中で途切れていた。その辺りにあった筈だが、日露戦争で日本軍が鹵獲した記念の大砲もなくなっていた。その代わりロシアの小型戦車、機関砲などが陳列されていた。そこから100ｍ位上の社殿が在った辺りには、白い美しい建物が建てられていた。ロシアの貴賓が宿泊する処だそうだ。豊原中学時代、ここで毎月１日の朝７時に早天修養会があった。朝早い爽やかな空気・厳冬の朝に見られた薄緑色に明けていった美しい空を思い出しながら神社跡をあとにした。

旧豊原公園では、小学校の時泳いだプールが草だらけになったまま、誰にも使われず残っているのを発見した。初めて耳に水が入った時先生が呼び水を耳に入れ、熱い水が流れ落ちた時のことを思い出した。公園の道端には、恐竜の形をした自由図書があり、恐竜のお腹の部分から本を取り出しベンチで本を読む親子、体育の授業だろうか数人ずつかたまって駈けている女子学生を見かけた。ここは、800ｍに及ぶ桜並木があり、その桜を寄贈し植樹した宮西豊さんという日本人のモニュメントが日本語とロシア語で書かれ公園の入口近くに建っていた。

昔と変わらず厳然とした姿で残る**郷土博物館**では、武装解除の様子の大きなパネルを見た。日本兵の一等兵達が三八式歩兵銃を重ね置き、ソ連兵が書類を手にして立っている。私の場合、この後除隊して自由に衛門を出ることが出来たが、このパネルの兵隊は自宅へ帰ることなくシベリアへの連行・過酷の労役が待っていたと思うと、ご苦労だったなという気持ち・気の毒な気持ちが沸き上がってきて、あの日ソ中立条約（不可侵）は何だったんだろうと不快な感情がこみ上げてきた。

まだ昔のままの美しい形で美術館として使われている**旧拓殖銀行豊原支店**では、当時から使われている階段、手垢であろう飴色になっても美しい大理石の手すり、美しい天井など見るにつけ、当時の日本の建築技術と美的感覚に驚いた。現在は、絵を保管するのにまだ使われているという大きな金庫をみて、昔兄貴の用心棒として、大金を卸すのに付き合わされ、この銀行に来た事を懐かしく思い出した。

最後に**旭が丘**では、ヒュッテが色こそ違え、昔のままの形で建っていた。遠くに樺太山脈が薄紫にかすみ、ユジノサハリンスクの街並みが昔の豊原の街並みと同じに見え何とも懐かしい景色だった。毎年冬の体育の授業は、ここでスキー滑走だった。スロープの凄さに怖くて涙を流しながら滑った。

この一日は、学生時代を思い出し大変懐かしい思いと終戦時の樺太を思い腹立たしさ、空しさが交錯する一日だった。

今回の旅行参加の目的

旅行参加には２つ目的がありました。明治・大正と豊原町の発展に微力ながら力を尽くして死んだ親父の遺骨を持ち帰ること。２つ目は自分が生まれ育った場所がどのようになっているかを見ることだった。それで第２日と第３日目は、自分たちで市内を歩き回ることにしていた。

第２日目は、自分たちの足で豊原の街を歩いた。昨日も今日も天気がいい。午前９時、ガガーリンホテル

▲大久保会長（左）、佐々木俊雄氏（中央）、本橋茂氏（右）

を出て爽やかな空気を吸いながら昔の神社通を歩き**豊原中学校**を目指した。５年間通い続けた校舎の面影は、極僅かだけ残っていたが、ロシアの将校公舎として使われた後、無人のため荒れ果て変わり果てた校舎は、懐かしいと言うより寂しさがこみあげた。中学校の隣は、昨日見た郷土博物館だが、門は閉まっていた。

その隣は、女学校だった。私の大の悪友が剣道の防具袋をぶら下げその前を通ると黄色い声で騒がれた**豊原女学校**は、もう無かったがこの辺りだろうと見て歩く。その先､樺太長官官舎が在った辺りにさしかかる。しかし､もう官舎はなく白樺の並木だけが残っていた。この官舎の回りは、土手になっていて幼稚園の頃この土手でロスケタンポポを摘んだりして道草をして歩いたのを思い出しながら、とうとう豊原駅まで歩いてきてしまった。この長い距離を中学の時は毎日苦もなく通ったものだった。

帰りは、市内循環のバスを使うつもりだったので、バスの路線地図を手に入れるため、郵便局に入ると、偶然にもそこは昔の豊原郵便局だった。1995年の火災で大分燃えたそうだが、昔とそっくりに見えた。路線地図は売っていなかったので駅に行くことにした。駅では若い警察官が親切にバスの番号とバス停をジェスチャーを交えて教えてくれた。

駅を出ると私たちはバス停とは違う方向へ歩き出した。駅の周辺を見てみたかったのだ。西一条通は無くなっており、西二条と思える道を路線に沿って北へ歩いた。途中機関車の展示場があり、昔の機関庫らしいところを見て真岡通りの近くまで歩いた。辺りには自由市場があった。市場で大きな蟹、ホタテ、鮭などみて、昔、豊原の街がニシン大漁で活気に溢れていた事を思いながら、とばを見つけたので買って帰ることにした。思い切って市内のバスに乗り込み、思ったより遠回りだったが無事に午後１時半にはホテルに到着できた。バス代は１人70ルーブルだった。

ホテルで少し休養して、午後３時から日本人墓地で慰霊法要に参加した。バスがやっと通れる灌木や雑草の荒れた地に無数の墓が鉄索で囲まれ散在していた。木の枝にこすれながらバスが進んだ林の中に、20m四方の墓地がありその中に「日本人死没者合同墓碑」が立っていた。慰霊の読経、ご詠歌、参加者全員が焼香をして、この地にさまよう魂に安らかに眠ることを祈った。

旅行３日目

日本人会会長白畑さんのご厚意で念願のふるさとを訪問することが出来ました。

最初、私の生まれ育った家の跡を探し回った。西三条と思われる道路を北に進むと線路の向こうに黒く高い煙突が目に飛び込んできた。乾留工場の煙突だ。まだ残っていたのだ。心が躍った。昔、家から踏切を越えて工場に遊びに行ったのだから。自宅は確かにこの辺りだ。線路まで進んだが､今は渡れなくなっていた。引き返して探し回った。道が曲がり雑草や灌木が生え昔の面影はなく、自宅のあったところがはっきりしない。ロシアの人に聞いてもらってもらちがあかず、たぶんこの辺だろうと決めて次の場所へ行くことにした。

そこから、昔通った第三尋常小学校へ案内していただいた。敷地は昔のままだったが建物は鉄筋の３階建ての校舎に建て替りロシアの学校になっていた。

次の真岡通りを下り鈴谷川に架かる西大橋を通り追分を迂回して、先ほど見た、乾留工場廃屋へ行った。今は小さい何かの修理工場になっていたが、煙突はそのままで懐かしく、昔肝試しに上まで登った時、空が大きく揺れ動いて恐ろしかったこと、家の前の道路で縄跳び・石蹴り等して遊んだことなどが懐かしく思い出された。

次に、私が生まれた樺太廳病院をご案内頂いた。会長さんが守衛の方にお話しして部外者の入ることの出来ない敷地内に入ることが出来た。生まれたときから91年経っても昔のままで、今なお陸軍病院となって白衣を着た医者や兵隊達が出入りしている様子を見て未だに現存し活用されていることに感動した。

いよいよ最後は、お寺だ。父と姉の遺骨が納められていたのは、西本願寺の納骨堂と記憶していたので、昔の第二小学校の跡を目安に探していただきました。予想はしていましたが寺は無く、そこにはコンクリートの大きな建物が立っており、勿論納骨堂もありません。現実、無いと分かっていながらも、胸の中には失望の寂しさが沸いてきました。納骨堂と思われる辺りに目星をつけ、持ってきた酒を献げて合掌し、遺骨の代わりに土を持ち帰ることが出来ました。白畑さんと昼食を取り、今晩のお別れ夕食会にお会いすることを約束しお別れしました。

２時にホテルに帰館後、今度は本橋さんと３人でまた市内を散策する事にした。

真岡通り（サハリンスカヤ通り）を西に下る19番路線バスに乗り、レーニン通りで下車、自由市場を覗き、また豊真線の踏切近くまで来てしまった。昔小学校の頃、この坂でスキー遊びをして転び、馬車に轢かれかかり恐ろしい思いをしたことを思い出しながら、もう一度生まれた場所を再度確認したくなり、この西二条の踏切を渡った。三条の三丁目は道を広げられ見当がつかないので、踏切を渡るとすぐ、昔四日組があ

った辺りから右折して、おぼろげな記憶に頼って奥に進んだ。歩き回っているうちに、真っ直ぐ西に続く道の終わりに第三小学校の校舎が現れた。学校が見えるこの曲がり角には柴山さんの家があり、そこから４件目が自分の家だという確信を得て、その辺りを見回すとすこには、鉄筋コンクリートの廃屋が建っていた。何とも無念だが場所を確認できたので、一応これで良しとして帰ることにした。

真岡通りの踏切に戻る。路上で真っ赤なフレップや茸、蜂蜜などを売っていた。フレップとプラムを買って20番バスの停留所まで歩いた。

バス停は拓殖銀行の前だった。拓殖銀行の隣りは広い公園になっており、昔デパートが在って、その後それが警察署になった場所だと分かった。今は広い公園になり、ロシア人が三三五五ベンチで休んでいた。私たちも木陰で買ってきたプラムとフレップを食べながら、この裏通りの何処かに警察の武道場があって、学校帰りに警察官の阿部さん達に稽古をつけてもらったことが懐かしく思い出された。一休みしたあとバスに乗り込んだ。

この日の夕食は、お別れ会で楽しく食事をすませ、３日間の旧豊原散策が終わった。

サハリンを離れるにあたり

いま　望郷の念(おも)いを果たし　心安らぐ
詩あり　国破れて　山河あり
城春にして草木ふかし　云々
まさに　鈴谷岳厳然として聳え　洋洋と鈴谷川流る
されど　古国　いまサハリンと言う他国

ユジノ自由プラン＋ふるさと訪問コース

栄　浜　へ

茨城県取手市　**藁　谷　良　樹**（わらや　よしき）

稚内からコルサコフ（大泊）への定期航路が今年限り、と聞かされて、私は何んとしてでも近い内にもう一度サハリンへ、の思いを強く持って帰宅致しました。

９月７日から11日迄の日程で参加した「第50回サハリン平和の船」、初めての出生地訪問の旅は予想以上の大きな収穫をもたらして呉れました。五歳迄過ごした「栄浜」の記憶は①番に海（砂浜）、②家の前にあった「忠魂碑の森」、③裏手の「夫婦沼」、④父の勤め先だった村役場、⑤栄浜駅舎です。旅程三日目に通訳のガイドさん、ドライバーさん（共に女性）に無理な注文を発しながら訪れました。海は栄浜が近付くと常に車の右側に続きました。私の毎日の遊び場だった忠魂碑の森では「此のあたりに石碑が…」と指摘した近くに土台石が残されていました。案内して呉れた近くに住むロシア人男性が、確かに石碑がありました、と教えて呉れました。森の奥への小径も存在していました。夫婦沼に掛かる橋は丈夫な車の通れる橋になり砂浜へ向っています。浜へはいつも父と一緒に行きました。私の住んでいた役場の官舎は此の橋のそばにありました。四軒あった建物は勿論今は無く古い木造のアパートが一棟建っていました。父が勤めていた村役場の位置も私の記憶で探し当てました。今は図書館になり新しい建物です。村役場の庁舎には短期間でしたが居住したこともありました。天井裏の書庫には梯子段で登り、中で紙屑まみれで遊んだ記憶があります。役場の前の道路脇に高い木造の櫓があって、確か半鐘台と呼ばれていたと思います。年上のお兄さん達が登りましたが五歳の私はいつも中段迄で終わり、でした。栄浜の駅舎跡探しでは近くに住む高齢のロシア人女性に協力して貰いました。高く聳える二本の鉄塔、地表に僅かに露出した二本のレール。ああ此処に駅があったんだ、と感無量に浸りました。そして此の老夫人は更に驚きの言葉を発しました。当時を知る日本人女性がいる、その人ならオシチノのことを知っている筈だと。私達は只ちに教えられた家を尋ねました。当のご本人は不在でしたが応対の男性が、「私が息子です。父は韓国

▲生家跡地付近でロシア人の人たちと

人で母が日本人です。」と言われました。オシチノとは終戦直後に住んでいた役場の官舎の一室に単身で住み付いたロシア人の名前です。五歳の私は此の異国人に大変可愛いがられた、と聞いています。彼は軍人ではなく役人だった様です。私の母は「部屋へ行っては駄目だ」と口ぐせの様に言っていたらしい。オシチノは部屋から顔だけ出して「来い、来い」と手招きする。部屋の中には大きなベッドだけがあって、そこが椅子でした。押入れの上段に黒パンや缶詰等が置かれていたのを覚えています。外出時、彼は素足に白い布をくるくると巻いて長い靴を履きました。白い布はタオルか風呂敷みたいなものであし（足）まこと呼んでいた、と思います。オシチノをしっている筈という日本人のお母さんに次に訪れる時には是非逢いたい。その思いを胸にしてホテルへ戻りました。

今回の旅で私にはもうひとり、その異国での暮らし振りを伺い度い人が出来ました。ユジノサハリンスクの名誉市民となられた「ふる里」（日本食堂）のオーナー宮西豊さんです。食堂を利用した折に短時間でしたが面談しました。名刺をいただき記念に写真も撮らせていただきました。別かれ際に「懐かしいなあ、それ、私に下さい」と宮西さんが言われました。私がサハリン行きに備え、財布の中に入れてあったテレビの番組表を切り抜いた小さな紙片です。民放で過去に放映された「世界のこんな所に日本人が…」と言うタイトルで宮西さんが紹介されました。

今回の栄浜めぐりは今の街の中心、商店街と思われる場所へは行きませんでした。もっぱら、草茫々の中、沼の周りや林、海岸などでした。時間的に余裕が無かったのです。

次回は隣接のドリンスク（落合）の様子も見たいし、私の引揚げ時の港、ホルムスク（真岡）にも行き度い。船が駄目なら空の便で、とも考えています。行ってみたい街、逢ってみたい人、近い日にもう一度サハリンを目指して、日々健康に暮らし度いと思って居ります。色々とご面倒掛け、そしてお世話になった「北海道日本ロシア協会」様、旅行社ノマド様、現地ガイドの方々に厚く御礼申し上げます。有難うございました。

ユジノ自由プラン＋ふるさと訪問コース

いまでも故郷は桃源郷

札幌市　林　正五郎（はやし　しょうごろう）

この写真をみて、生まれ故郷の訪問と慰霊を兼ねて第50回サハリン平和の船に参加しました。

特に慰霊には、江戸時代末期、元治元年宮城県丸森町生まれの祖母（さと）が、戊辰戦争の影響で余市郡赤井川村に開拓に入り、さとの夫が兵隊に召集されたあと、子供が幼いため、さとは故郷に戻り、夫が除隊後、上川郡士別で鉄道員として勤務しましたが、日清戦争が始まり、日露戦争で兵隊に召集され戦死しました。

このとき、さとは44歳でした。そしてさとが60歳のとき、大正13年５月に長男正一と入植地、旧樺太に農地開拓者として、稚内から宗谷海峡を越えて、更に鉄道で北上して、知取町知取沢に辿りつきました。このときの家族４人（祖母さと60歳、父26歳、母21歳、兄茂１歳）でした。

今回私は、日本語ガイドエリーナさんと運転手エリーナさんと同伴し、道路を北上しての旅路となり、親達がどんな思いで開拓地に向ったかを感じ取るために、辿ってみることにしました。

2015年９月10日㈭午前８時50分、ガガーリンホテルを出発し、途中ガイドさんが、落合とのことでそこには朽ちはてた、王子製紙の煙筒が見え、私の兄が発電所に勤務していたことを、思い出しましたが、車はすぐ、落合の街を通りすぎました。

山道は下り坂でやがて、オホーツク海にでました。この海の向こうに北海道があると思い、海を眺めていると、ガイドさんが、「内淵川です、この川は今でもただ一つ、日本名で残されています」と教えてくれました。

海岸線を更に北上すると、峠道でガイドさんが「マカロフの地域にはいりました」と教えてくれました。

やがて左側に線路が見えてきました。遠くにガスが掛かった岬の突端が見えて寂しく感じていました。

91年前親たちは、北の大地を目指して、大いなる希望を持って、鉄路を北上して行ったと思います。道行はやがて、元泊（私の戸籍樺太元泊郡知取町大字知取沢と記載）を過ぎると、右側にマカロフと書いてある立てカンバンがあって、我が故郷知取町に入ってきました。

遠くの記憶を思い出し、心は高揚の気持ちでした。やがて見覚えのある駅構内があり、この知取駅から68年前（1948年）夏に、貨物列車に乗り、真岡港か

▲昭和16年６月、家族写真

ら宗谷丸に乗って引き上げてきました。

あれから68年振り、念願の訪問となりました。

しかし、街は、王子製紙が無くなり、小雨のせいかもしれませんが何故かさみしく、寒く感じられました。

ガイドさんが、知取町在住の日本人の石川さんとの連絡をとり、ご夫婦でお会いして、知取川の河口から川添えに開拓地、知取沢まで、車で案内してくれました。

〔石川さんについては、ロシア協会の森川副会長さんから、事前に連絡をとって頂き、心から感謝しています〕

石川さんの案内で砂利道を川添えに沿って走り、やがて峠道に入り霧が濃くなって、途中、石を積んだダンプカーとすれ違い、奥に砕石場があると聞きました。峠を下るとやがて、車の窓超しに平地が見えてきました。あっあそこが、我が生まれた大地、あの山波がはっきりと蘇ってきた。親達が農地として開墾した北の大地です。

石川さんの旦那様が、車を止めて、ロシア人が居る小屋で（写真）事情を話して、この方の親達がこの地を1924年（91年前）から、農地に開墾した旨を説明しましたら、ロシア人が笑って、握手して、この畑を耕すと日本人が使った、割れた食器が出てくるよと、教えてくれました。また、気候が暖かく作物が出来ると話してくれました。親達が、開墾した農地を今ロシア人がダーチャにして、家庭菜園を作っていました。

家は山側に昭和17年に新築し、横24軒、縦12軒、家族と家畜が半々で使用し、二階は家畜の越冬用餌さなど保存し、冬は寒さが厳しいためにログハウス式の家でした。

姉たちは、「家の裏山の山間辺から、よく山にのぼり、フレップ採りと、山菜（ラワンフキ、ワラビ等）採り、特にキノコで大きいムラサキヒメジをとった」と楽しい思い出話を良く聞かされました。

石川さんが川まで案内していただきここでお別れしました〔心から感謝しました〕。細道を行くと、川の臭いが鼻につうんときました。臭いの記憶が蘇って、川を降りると、産卵したカラフトマスがほっちゃれとなって、岸に上がってそれを空からは沢山のカモメが飛んできて食べていました。

知取川は昔兄達が、「川遊びでマス、サケ、ヤツメウナギなどを捕り、またイワナ、山女などを釣って野山を駆け巡っていた」と何時も話していました。

今回の目標の一つは、祖母（79歳）と茂兄20歳（写真左上）、弟（１歳）で亡くなっているので、その慰霊をすることでした。家の近くに、赤レンガ造りの火葬場があったそうですが、草木が伸びていて、見つけることは、出来ませんでしたが、近くの丘で慰霊してきました。

また、今回参加していた真言宗、伊藤住職に、私の慰霊の事情を話し、〔塔婆〕を書いて頂いたお陰で、それを添えて慰霊をすることができました。

〔伊藤住職には、心からお礼を申し上げます〕

慰霊した場所から、大自然の山並みに囲まれ安らかに休んでくださいと祈念いたしました。

さて、江戸末期、宮城県生まれの＜祖母さと＞は何故60歳すぎてからの、遥かなる北の大地の旅路に出たのでしょうか、この開拓地は祖母と親達は桃源郷に思えたのだと思います。祖母の生まれた故郷の山並みが非常によく似ていて、気候も良く、農産物の収穫が良かったと聞きました。

晩年は小さな白い家を建ててもらい、ビールを嗜みながらの79歳の旅路で終えました。

小雨の中、慰霊も無事終えて、霞んで見える生まれ故郷を後にして、知取町のレストランで午後14時30分過ぎの昼食で、大変美味しい蟹とホタテ料理をいただきました。帰り道ガイドさんが「朝鮮人が路上で木の実（コケモモ、アタマハゲ）の販売があるので買いましょう」といわれ、子供のころ、食べた甘酸っぱいアタマハゲを兄弟たちにお土産として、買いました。

ガイドさん達のお陰で無事訪問と慰霊の旅を終えることが出来ました。感謝しています。

ただ、あまり現地での時間が少なく、心残りです。

元気な体さえあったら、また訪ねてみたいです。

帰りは台風の影響で船上が揺れて、お腹の調子が悪くなり、挨拶も出来なく失礼いたしました。

沢山の素晴らしい人達の出逢いがあり、私も元気頂きました。

皆様の感謝と健康をご祈念いたします。

本当にお世話になりました。

第10回北海道・サハリン州市民交流会議

「第50回サハリン平和の船に参加して」

札幌市　佐　藤　友　則（さとう　とものり）

私は、弊社の八代、小山内とともに、９月７日から11日まで「第50回サハリン平和の船」に参加させて頂いた。

今回50回という節目を迎えた「サハリン平和の船」は、我々の参加主目的である「第10回北海道・サハリン州市民交流会議」のコースの他に、「平和観音像建立慰霊」「旧国境と敷香訪問の旅」「ユジノ自由プラン+ふるさと訪問」の合計４コースの参加者から構成されていた。

さらに本年は戦後70年ともあって、慰霊を目的とした洋上慰霊祭、日本人墓地での慰霊祭も開催され、我々も参加し戦没者の方々のご冥福をお祈りした。

私は今回の参加で印象に残ったこととして、次の３点を挙げたい。

まず１点目は、今回参加された方は20歳から91歳の方と幅広い年齢層だったが、その中で福島から参加された佐々木俊雄さんと出会って様々なお話を伺ったことである。佐々木さんは21歳まで当時の豊原市（現在のユジノサハリンスク市）に住んでおり、今回70年ぶりに訪問されたとのこと。当時のお話を伺い、佐々木さんにとっていまだに戦争は終っていないことを実感させられた。

２点目は、ユジノサハリンスク市内に日本企業向けのオフィスビル「HOKAIDOU CENTER」が10月23日にオープンすることである。オープンセレモニーには北海道知事もご出席予定とのことである。サハリン州におけるビジネス拠点の設立で、どのようなビジネスが展開されるのか大いに興味を持った。

３点目は、当社がこれまで支援をしてきたサハリン州国立総合大学のミシコフ名誉総長とコルスノフ国際関係研修事務局長に、市民交流会議の場でお会いできたことである。

両名から当社のこれまでの支援に対して丁重なお礼と今後の支援継続への要請があった。また、今回ロシア語に訳したテキストをコルスノフ事務局長に手渡すことができた。その場に２名の大学関係者も同席しており、渡したテキストを見ながら大変わかりやすいとの感想も述べてくれた。またできれば本教材に関して日本で研修を受けたいとの要望を受けた。

当社がそもそも平和の船に参加してきたのは、CSRの一環である。サハリン大学を通じて学生の知識向上に貢献し、その中で日本製品の良さをPRできればと思っている。

今回は５日間のうち移動日を除くと実質３日間の滞在であったが有意義な滞在となった。是非今後も平和の船が続く限り、当社からの参加を継続させていきたい。

以　上

▲第10回市民交流会議会場にて

▲ユジノサハリンスク市、観光名所「山の空気」にて